

復活節第7主日 (昇天後主日) ヨハネ17章11-19節

「新共同訳」

11 わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。12 わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。

13 しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。14 わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。15 わたしがお願ひするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってください。とです。16 わたしが世に属していないように、彼らも世に属していません。17 真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。18 わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。19 彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。

① 告別説教とイエスの祈り

④ 13章30節には、イスカリオテのユダがイエスから「パン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった」と述べられている。その直後、イエスは「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった」と語り、自分が弟子たちから離れて行くことを告げる。この31節から世を去るイエスが弟子に残した「告別説教」が始まると見られている。

⑤ 13章34-35節では、イエスは弟子たちに新しい掟を与え、「互いに愛し合いなさい」と命じるが、36-38節にはペトロの離反の予告が挿入されているので、「告別説教」が本格的に展開されるのは、14章1節からである。「告別説教」は16章まで続き、その直後の17章では、「これらのことをイエスは語った、そして彼の目を天へと上げて言った」と始まり、イエスが後に残す弟子のために祈りをささげる。

⑥ イエスの祈りは17章の終わり(26節)まで続く。イエスが祈り終えると、ユダに引き連れられた兵士たちは、「松明やもし火を手にして」、イエスを捕らえにやって来る(二八3)。パン切れを受け取って、「夜」イエスのもとから離れ去ったユダは、松明を手にした世の闇と共に、イエスを捕らえるために近づく。「松明やもし火を手にして」という表現は共観福音書(マタイ・マルコ・ルカ)には見られない。イエスの「告別説教」は、13章30節の「夜であった」と18章3節の「松明やもし火を手にして」に挟まれる形に配置されている。このように配置することによって、「告別説教」が語られる家の外は闇の支配にあることを暗示している。

⑦ イエスは「父よ、時が来ました」(一七一)と語り、祈り始める。ここでの「時」とは、イエスが十字架の死によって父のもとに帰る時を指す。その時、父なる神は子なる神に栄光を与え、子なる神は父なる神に栄光を与える。父のもとに帰るイエスは、この世に残される弟子たちのため

に祈る（11節）。彼らは「世の中からあなたが私に与えた人々」であり（6節）、「あなたが私に与えたすべてのものはあなたのもとからある」（7節）こと、「あなたのもとから私は出て来た」（8節）ことを知っている。

②「私たちが（一つである）とおりに、彼らが一つであるように」（11節）

そして もはやない 私はある 世の中に、

そして 彼らは 世の中に ある、

そして私は あなたのもとへ 行く。

父よ 聖なる方よ、

あなたは守ってください 彼らを

名の中で あなたのところの あなたが与えた 私に、

ようにと 彼らがある 一つで とおりに 私たちが。

①ここでの「彼ら」はイエスの直弟子たちである。イエスは彼らのために「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください」と祈る。彼らは世に残されるが、世は彼らを憎んでいる。なぜなら、イエスが「世に属していないように、彼らも世に属していない」（16節）からである。

②イエスは自分が父のもとに行った後、この世に残される弟子たちは、イエスと敵対し迫害した世との闘いを引き継いで行く。その彼らを父なる神が「守る」ことをイエスは願っている。父と子が一体であるように、弟子たちも一致するように神が守ることによって、弟子たちはこの世との闘いに向かっていく。

③「あなたが私に与えたあなたの名の中で守る」ことをイエスは願う。「あなたの名を私に与える」とは、キリストが神を完全に啓示したことを意味する。

③「彼らが持つようにと 私の喜びを 満たされているものを 彼らの中に」（13節）

④11節で「そして私は あなたのもとへ 行く」と述べた後、13節でも「だが今 あなたのもとへ 私は行く」と、同じ表現が繰り返される。この繰り返しの後では、「彼らを守る」とはどのような意味で述べられているのかが、さらに具体的に示されており（15節）、二つの段落に分けることができる。13節以下の後半では、イエスはまず「私の喜び」を弟子たちが持つことを願う。

⑤「喜び（カラー）」

⑥カラーは、「喜び（こと・喜び）」を意味する。「天」や「天使」の喜びを表すこともあるが（ルカ一五七・10）、多くは神からの救いを見出した人間の喜びを表す。こうした用法は共観福音書や使徒言行録に見られる。洗礼者ヨハネの誕生を告知されたザカリア（ルカ一14）、福音を告げられたイスラエルの民（二10）、メシア誕生を示す星を見た学者たち（マタ二10）、御言葉を受け入れた人々（マコ四16と並行記事）、畑に隠された宝を見つけた人（マタ一三44）、復活したイエスに出会った女性や弟子（マタ二八8、ルカ二四41）、昇天するイエスを見送った弟子（ルカ二四52）、フィリポが行う奇跡を喜ぶサマリアの人々（使八8）の「喜び」を表す。

④このような喜びは人間が作り出す喜びではなく、神から来る喜びである。このことを強調するのはパウロである。人を喜びで満たすのは神である（ロマ一五13）。神の国とは飲み食いではなく聖霊によって与えられる喜びであり（一四17）、喜びは霊が結ぶ実である（ガラ五22）。御言葉を喜んで受け入れたテサロニケの信徒は、キリスト者の模範とされる（1テサ一6）。  
⑤パウロが使徒として働くとき、そこには喜びがある（ロマ一五32）。どんな苦難のうちにあっても喜びが満ちあふれている（2コリ七4）。パウロの祈りは喜びを伴い（フィリ一4）、教会の信徒たちはパウロの喜びであり（フィリ四1、1テサ二19・20）、彼らの喜びのために働くことがパウロの務めである（2コリ一24）。

⑥ヨハネ文書では福音書で9回、1ヨハネ・2ヨハネ・3ヨハネで1回ずつ使われる。ヨハネ福音書15章11節には2回の用例があり、まず「私の喜び」とあるようにイエスに使われる。ヘブライ12章2節「ご自身の前にある喜び」を除くと、この語をイエスに使うのはヨハネ福音書に限られている。

◎ヨハネ17章13節でも「私の喜び」という表現が現れる。

だが今 あなたのもとへ 私に行く  
そして これらを 私は語る 世の中で  
ようにと 彼らが持つ 私の喜びを 満たされているものを 彼らの中に

⑦死はイエスにとって「神のもとに」行くことであり、もといた場所に帰ることである。しかも、「私の喜び」とは、「神のもとで」享受していた喜びであって、イエスが自分だけで作り出した喜びではない。神のもとで享受した喜びを世へ運ぶことがイエスの仕事であり、この喜びは父との交わりによって引き起こされた喜びである。この喜びは外へ広がる力を持っており、父からイエスへ、そしてイエスから弟子へ、さらに弟子から信じる者へと伝わってゆく。

⑧そこで、1ヨハネ1章4節は、「わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです」と述べ、2ヨハネ12節でも「あなたがたに書くことはまだいろいろありますが、紙とインクで書くとは思いません。わたしたちの喜びが満ちあふれるように、あなたがたのところに行って親しく話し合いたいものです」と書かれる。ヨハネ15章11節でも、「私の喜び」は「あなたがたの喜び」となって、弟子たちへと広がっていく。

⑨イエスから出て行く「喜び」は、「わたしたちの」喜びとか、「あなたがたの」喜びと言われるように、複数の人たちの喜びである。複数形が使われたのは、弟子は単独で働くのではなく、共同体として行動するからだだが、この共同体は弟子だけから構成される共同体ではない。この共同体の中心には、「父なる神」と「子であるイエス」の深い交わりがある。この交わりにイエスを信じる者が招き込まれ、さらに大きな共同体となっている。この共同体に生命力を与えているのは愛である。だから、ヨハネ15章9節では「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」と述べ、神とイエスと弟子を貫く愛に言及している。

⑩1ヨハネ4章9節に「神は、独り子を世にお遣わしになりました、その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました」とあるように、イエスを通して世に愛を示す神に触れることが、私たちに「喜び」をもたらす。人は純粋な愛に出会うときに、「喜び」に満たされるからである。

#### ④世に残される弟子たち

① 新共同訳はヨハネ17章を三つの段落、1―5節と6―19節と20―26節とに分けている。20節以降を新しい段落としたのは、イエスの祈りの対象が直弟子から、直弟子の「言葉によってわたしを信じる人々」に移行していることに注目したからだと思われる。このように、段落分けの基準を「祈りの対象となる相手」に置くのであれば、第二段落は、9節の「彼ら（＝直弟子）のためにお願います」から始まると見ることが出来る。確かに、6節「世から選び出してわたしに与えてくださった人々に……」から直弟子についての説明が始まるが、ここでの直弟子は、イエスの祈りの対象というよりは、イエスを通して働く神の栄光の具体例と見るべきだと思われるからである。これが正しければ、イエスの祈りの構成は、三つの段落（1―8節、9―19節、20―26節）に分けて考えることができる。

② 第三段落（20―26節）では、直弟子の宣教活動によってイエスを信じるようになった人々のために、イエスは「あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人一つにしてください」と祈る。第一段落で「知り、信じた」のはイエスの業と言葉に触れた直弟子であったが、第三段落では「世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。…わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります」というように、「世」が主語になる。イエスの直弟子もかつては世に属していたが、「今は」イエスが誰であるかを知って、世に属さない者となった（第一段落）。彼らは「世」に残されて、イエスの使命を受け継ぐことになる（第二段落）。こうして、世は直弟子と同じ道をたどり、「知って、信じて」世から離れることになる。イエスが父から遣わされたのは、世を捨て置くことのできない父の思いを現すため、「世を世でなくす」ためである。

#### ⑤イエスの願い

③ 11節の「彼らを守ってください」というイエスの願いは、15節では具体的に「彼らを世から取り去るのではなく、彼らを悪い者から守るように」と述べられている。イエスがこのように願う求めるのは、「わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わした」（18節）からである。神がイエスを世に遣わしたのは、3章16節に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が…永遠の命を得るためである」とあったように、世に愛を示すためである。神は背く世を捨て去ることができずに、イエスを遣わして、命への道を示した。イエスの直弟子が世に残されるのは、イエスの業を受け継ぎ、世に神の愛を示すためである。

④ イエスを憎み、弟子たちを憎む「世」は、「真理である神の言葉」を知らない。「悪い者から彼らを守る」とは、「真理である神の言葉によって彼らを聖とすることである（17節）。神の言葉を完全に現すために御子イエスは自分を「聖とする」。イエスの死によって現わされた真理によって、弟子たちも「聖とされている者となる」（19節）。「聖とする」という動詞ハギアゾーが17節と19節（2回）に用いられている。ここでのハギアゾーには、神が与える使命を果たすために「神のものとする」という意味合いがある。弟子たちの使命は、真理である御子イエスをこの世に告げることである。世に残されて、その使命を果たすときに、弟子は自らが神のものであることを明らかにすることができる。